2024年4月25日

教育開発支援機構　教育開発・学習支援センター

2023年度教員による授業相互参観実施状況報告書（教育開発・学習支援センターホームページ掲載内容）

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】（実施方法・効果など）	次年度への課題
法学部	【法律学科】今年度着任した教員の担当科目 【政治学科】専任教員全科目 【国際政治学科】専任教員全科目	【法律学科】4科目 【政治学科】3科目 【国際政治学科】3科目	【法律学科】 　下記のとおり、今年度の新任教員担当授業を中心に、専門分野を同じくする専任教員による相互参観を行った上で法律学科会議において報告がされ、教員間で共有が図られた。 ・「債権回収法Ⅰ」（滝沢昌彦教授）⇒川村洋子教授 ・「労働基準法」（藤木貴史准教授）⇒沼田雅之教授 ・「刑事訴訟法（法曹コース）」（朝村太一准教授）⇒佐藤輝幸准教授 ・「刑法総論I」（佐野文彦准教授）⇒朝村太一准教授 【政治学科】 　複数の教員によって担当される「現代政策学特講」において授業内容の相互参観および意見交換が行われた。また、1年生向けの「政治学入門演習」(8クラス開講)においても、「政治学入門I･II」と緊密に連携し、その講義内容を相互に参照する機会を設けている。それに加えて、「政治学入門演習」の担当教員間で全クラスの学習成果を共有した。このことにより、特に少人数教育の教授法の理解が深まった。 【国際政治学科】 　国際政治学科の必修科目である「国際政治への案内」においては、本年度も複数の教員で担当し、各教員の専門分野を紹介し、国際政治学を鳥瞰できるような講義を展開した。工夫が施されたレジュメとスライドを教員間で共有し、互いに講義の内容を把握できるよう努力した。「国際政治ワークショップ」に関しては、事前に入念に担当教員で準備を行い、学生のプレゼンテーションが円滑に行えるような工夫を練り、本番に備えた。教員の講義内容に関しては、互いに詳細を把握できるようコミュニケーションを充実させた。また、今年度は講義の最後に学内の会場で懇親会を開催して、プレゼンテーションに対する表彰と総評を行い、学生と教員の交流を深めた。「戦後国際関係史」に関しても、担当教員4名が事前 に入念に内容を話し合い、配布するレジュメを共有し、全員の担当部分を横断した試験問題を出題するために、緊密に連携した。最終回では昨年度と同じく、担当教員一同が教室に集合し、「シンポジウム形式」で各々の専門分野の立場から国際関係の歴史や現状について論じた。	【法律学科】 ・相互授業参観につき、今年度は秋学期に実施されたが、春学期中のより早い時期に実施した方が、本学の教室設備への対応等も含めて、新任教員への配慮を検討する機会となる。 【政治学科】 　とくに政治学入門演習について、相互参観をより実質化することが課題である。合同演習日を設ける等の方向で検討している。 【国際政治学科】 　「国際政治への案内」については、今年度から評価をレポートから試験に戻し、学生の出席状況を把握できるようなリアクションペーパーを課した。今年度は試験の平均点が低かったので、評価方法については引き続き議論が必要である。「国際政治ワークショップ」については、学生モニターの結果も踏まえて、さらなる講義・演習の充実を目指す。「戦後国際関係史」については、複数の教員で担当することから、各自のコマ数が限定されている。その少ない回数のなかで、いかに濃密な歴史の講義を行うか、各教員の講義にいかに繋がりを持たせるかを課題としたい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
文学部	哲学科:15 日本文学科:26 英文学科:7 史学科:3 地理学科:17 心理学科:23 共通科目:2	哲学科:0 日本文学科:3 英文学科:0 史学科:1 地理学科:3 心理学科:0 共通科目:2	【哲学科】 哲学科における本年度の授業相互参観は行われておらず、実施科目数が 0 件となった。これは各教員が自身の担当授業の準備と実施に多くの時間を要していることに起因するものと想定される。 【日本文学科】 前日までにメールで授業担当教員に事前許可を得るという申し込み方法をとった。説明の口調や授業の進め方、配布資料・スライド資料の作り方等の面で自身の授業運営の参考になるだけでなく、自身の専門分野と関連する授業科目を参観することで、自身の研究内容を深められるという面でも有益であったという意見もあり、効果が出ていることが認められる。 【英文学科】 ■FD ミーティング等実施回数:7 回 (文学系 4+1、言語系 2) ■内容・成果:以下の項目について情報共有や意見交換を行なった。 ・文学系レポート・卒論用書式の説明文書の改訂 ・クリエイティヴ・ライティング(英詩の創作と相互鑑賞)の模擬授業とワークショップ ・今後の文学教育の方向性 ・学科の新入生向けに外国語選択についての示唆を出すか否か ・言語系の将来的なカリキュラム改革のビジョン ・専攻における学科科目の履修制度(修了要件内)を模索すること ・科目の履修条件が、学年指定のみとなっており、科目の内容に応じた既習科目・知識が指定できていないこと 【史学科】 対面授業に参加した。授業の進め方など参考になる部分もあったが、やはり専門分野が異なるため直接に活用できるところはなかった。 【地理学科】 今年度、地理学科では 3 科目に合計 30 人の参観者数があった。それらの参観者は授業に参加する形で参観を行ったものである。 効果としては、上述のとおり授業に参加する形での参観であったため、授業内では受講学生ともディスカッションが行われたことで受講学生が刺激を受けることとなった。また、担当教員にとっても、参観者が受講学生に対して自分とは異なるコメントを行っていたため、新たな気づきが得られた。 【心理学科】 授業相互参観は実施しなかったが, 複数の教員が同一内容の授業を担当する演習系科目(演習Ⅰなど)では, 兼任講師も含め授業の進め方について年に数回ミーティングを開催し、授業の進捗や課題、成績評価などについて情報共有を行った。授業の進度、採点基準等についての教員間のばらつきを軽減したり、学生のモチベーションを上げる方法など、授業改善に寄与する情報を共有するなど一定の効果が得られた。	【哲学科】 他の教員の授業を相互に参観し、その授業の実施方法に見出される効果的な手法を自身の授業に反映していくことの意義を、次年度の開始時に改めて学科教員間で共有する機会を設けることが肝要であると考えられる。 【日本文学科】 昨年度に引き続き、対象科目はいずれも完全対面形式であったことも影響し、実施できた科目数が少なかったのが課題である。教員がリレー形式で担当するオムニバス授業は参観のハードルが比較的低いので、オムニバス授業の参観を促すとよいかもしれない。また、これまで公開科目には含めなかったゼミナールに参観するケースも見られるようになったため、今後はゼミナールの一部を公開科目に含めることも検討したい。 【英文学科】 引き続き FD ミーティングを開催し、効果的な授業実施方法についての意見交換および教育内容の検討を行ない、必要な改革や改善を実施する。 【史学科】 教員や事務に寄せられた授業および学生に関する情報を、学科会議で共有し、適切に対応していくことを確認した。 【地理学科】 公開科目数に比して, 実際に実施された科目数は多くない。実施科目数を増やす方策を考える必要がある。 【心理学科】 授業以外の時間は会議などが多く、授業を参観する時間的余裕がなかったり、教室サイズが狭く参観者が参加できないなど物理的な問題がある。 【共通科目】 今年度の反省点を元に、「文学部共通科目実施方法マニュアル」を作成し、スムースに授業を運営できるよう配慮する。
経済学部	65科目	6科目	(1)実施方法 ①公開方法 経済学部専任教員は各担当科目のうち原則として1科目は授業相互参観科目とする。 ②参観方法 経済学部所属教員は、所定の期間内にあらかじめ参観申込をしたうえで授業参観することとする。 ③公開期間 2023年6月12日(月)～6月16日(金) 2023年9月20日(水)～2004年1月20日(土) (2)授業実施者へのフィードバック等 参観申込み者には、執行部まで①授業担当者に対する感想、②授業相互参観制度に関する意見・感想の提出を依頼した。①授業担当者に対する感想については、授業担当者本人にフィードバックを行った。	(1)公開科目数に対して実施科目数が少なかったため、実施時期直前の周知を工夫し、実施期間の延長等を検討し、実施科目数を増やし、経済学部の教育力の向上を図ることが今後の課題である。 (2)オンライン(リアルタイム・オンデマンド)・対面の効果について、何らかの効果測定が可能であれば有益と考えるが、工夫まではまだ思いつかないために、次年度以降の課題として引き継ぎたい。
社会学部	全開講科目	40科目	①オムニバス型の授業での実施(1科目) 教員間で、授業の方法や内容に関する打合せを行っている。参加した教員にとって、今後の授業運営の参考となっている。 ②本学部ゲスト講師制度を利用した外部講師を招いての授業をとおした実施(38科目) 外部講師を招聘し、その授業を参観するだけでなく、外部講師との意見交換を行 った。授業方法や内容に関して、刺激を受けることができた。 ③専任教員担当の授業に別の専任教員をゲスト講師として招く形での実施(1科目)	授業相互参観を含めた教員間の交流を通して、授業の方法・内容のさらなる改善を図ることを促す。今年度は、ゲスト講師制度の利用科目は昨年度よりも増加した。オンライン上でもゲスト講師を招聘出来る事が浸透してきたため、今後も授業内容の充実化や活発な議論を増やす機会にしたい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
経営学部	専任・兼任教員の全科目	4 科目	(1) 実施方法・時期 公開対象は、原則として専任・兼任教員による講義および演習授業とした。参観は、2023 年度秋学期授業を対象とした。 (2)実施科目数を増やす工夫 昨年度までは、各教員が関心のある授業の担当教員にメール等で直接コンタクトを取り、授業参観を実施していたが、今年度は、事前に「授業参観受入可/不可&授業参観可/不可アンケート」を実施した。参観可の教員は 11 名と少なかったが、32 名の教員にのべ 42 科目の参観の受入可能と申し出ていただけた。オンライン・オンデマンド授業もOKという先生もいらっしゃった。 大木良子先生にはすべての授業(4 科目)、福多裕志先生、石原紀子先生には 3 科目と複数可能とご回答をいただいた。ILAC の先生(英語、数学、生物、体育)の先生がたにも快諾いただけたが、件数としてカウントされないとのことで残念であった。 エクセルで参観受入可能科目の時間割を作成し、選びやすくしたが、実施科目数は 4 件と少なく、アンケートの効果は出なかった。 (3)効果 参観者は、執行部および授業担当者に対して授業内容の感想や改善点について、所定のフォーマットを用いてフィードバックを行った。 すべての参観者から、自らの授業に活かせる学びが得られたというポジティブな反応が得られた。 具体的な学びは以下の通り ①授業のストラクチャー(構成)の工夫 導入時、学生への刺激 ②コンテンツの工夫 最新データ、実践データ、社会科学の研究との架橋 ③活用メディアの工夫 デジタル・メディア、クラシック・ツール ④コミュニケーションの工夫 学生同士のディスカッション、学生とのインタラクション	実施科目数が昨年度の 16 件から 4 件に激減した。今年度は春学期に動けなかったのが一番の問題だった。次年度は事前周知とリマインドを徹底することで実施件数を増やす。 具体的には以下の通り。 ①リマインド 来年度は 4 月教授会で事前周知開始、履修登録者が確定する GW 明け以降、リマインドを複数回行う。 ②参観のメリットを周知 専門の異なる分野の授業を参観することで、異なる視点から授業運営等に関する学びが得られる点など、今年度の参観者から得られたポジティブなフィードバックを紹介することで、相互授業参観のメリットをより積極的に周知する。 ③参観のしやすさを周知 オンラインやオンデマンド授業でも実施が可能であることを周知する。 ④GBP 科目を増やす プログラム主任と連携して、GBP 科目の参観件数を増やせるよう努める。 ⑤思い出作り 実施年度に定年を迎える教員にも、思い出作りとして参観を受け入れいただけるとありがたい。
国際文化学部	専任教員が担当する全科目	44科目(春学期 26科目、秋学期 18科目)。ただし、同一科目名で曜日・時限の異なるものは複数科目とした。	春・秋学期ともに、教員から参観をすすめる授業の科目名・曜日時限・教室・公開時期を募り、提供された科目をリストにして教授会で共有、相互授業参観をよびかけた。2021年度、2022年度に続き今年度もオンデマンド授業についても参観可能としたが、ほぼ対面方式の授業であった。不参加理由として時間割や他業務により参観の時間を作るのが困難との意見が多かった一方で、授業を参観した教員からは授業相互参観の有意性を示すコメントが寄せられた。	実施科目は増加したが参観に参加する教員が減少している。今回不参加だった教員も含めたアンケート調査を行った結果「多忙により参加が困難」「オンデマンド形式なら参観しやすくなるような気がする」等が理由として挙げられていた。次年度も基本的に対面授業であることからさらに調整が困難になると予想されるため、授業相互参観の目的とともに積極的な参加を呼び掛ける必要がある。
人間環境学部	全科目	11(フィールドスタディのコースも1科目とカウントした。)	1.「人間環境学への招待」 この科目は春学期に開講されている1年生必修の専門科目であり、毎回それぞれ2名程度の教員が各自の専門性を踏まえた講義を行い。専任教員のほぼ全員が1回は登壇するため、コーディネーターの教員(4名)にとっても、登壇する教員にとっても、お互いの授業の手法や研究アプローチを知ることができる貴重な機会となっている。 2. フィールドスタディ 2023年度は12コース(キャリアチャレンジおよびField Workshop(SCOPE科目)を含む)を実施し、そのうち6コースで複数の教員が企画・運営にあたった。事前・事後授業や現地訪問において、専門が異なる教員がお互いに啓発し、刺激し会う格好の機会となっている。 3. 人間環境セミナー この授業は学外の実務者や研究者など(計12名程度)を講師として招く講義科目である。各講師が活躍している現場や職務などを講義を通じて学生に知ってもらうことが目的であるが、複数の教員でチームを作って企画や講師選定にあたることがあり、授業にも参加することから、教員同士のディスカッションの場にもなっている。2023年度は計3科目(春学期1科目, 秋学期2科目)の人間環境セミナーを実施した。 4. ゼミへのゲスト参加 1名の教員が他の教員のゼミを参観し、コメント・講評を行った。学生にとっても、指導教員とは異なる専門分野の教員とゼミで交流する機会はあまりなく、刺激的な経験であった。	上記4は教員個人ベースの授業参観である。これは手軽に実施でき、その小さな試みの積み重ねが大きな成果につながる可能性を秘めているが、各教員の自発性に任せていると増えてゆかない。やはり、そのための仕組み作りが課題となろう。また、過去には、ゼミの合同開催が行われたことがあり、教員にも学生にも好評だったと聞いている。これは上記4よりも更に高い密度の相互参観であり、このような場を醸成してゆきたいと考えている。
現代福祉学部	本学部専任教員の担当科目(ただし、演習・実習科目、情報・調査系科目、言語コミュニケーション科目、その他、担当教員が公開を希望しない科目を除く)	5科目	＜実施方法＞ 今年度は、基本的に対面式授業を展開しつつ、教育的効果を期待できる場合に限ってオンラインを活用した授業を行った。そのため授業参観も対面式には教室に参観し、オンライン活用の授業にはオンラインから参観した。また参観対象を増やすため、公開期間は授業実施期間とした。 ＜得られた効果＞ ・授業参観では、他教員の授業実施の方法や工夫点、スライドの作り方や話し方、説明方法などを実際に見聞することができ、自身の学びとなるとともに、教育内容や方法の改善に向けた認識を共有することができたとの意見が寄せられた。 ・また、対面式、オンラインいずれの授業においても実践者、活動家や当事者を招いての授業も行われ、教員や学生以外の視点を学び、刺激を受けることができた。 ・さらに、受講者数の多いオンライン授業では学習支援システムの掲示板に受講生がリアクションを書く流れになっており、受講生の感想や反応は、事後でゲストの講師に伝わるようフォローもされており、オンラインでも現場でのライブ感を共有できる授業活用は実現できることが示された。	・今年度は参観対象を増やすために実施期間を限定しなかったが、依然として参観人数が少ないことが課題である。教授会やFD研修で授業相互参観の結果を共有するとともに、教員間の交流の機会を増やし、授業の方法・内容のさらなる改善を図りたい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
情報科学部	全科目	8科目	情報科学部では、全科目を授業相互参観可能にしており、報告があっただけでも8科目10回の授業参観を実施した。 情報科学部の開講科目には、複数教員による共通内容の実施科目が多い。このような科目では、授業の進め方、貸与PCの利用方法などについて共有が重要である。また、座学と演習科目を組み合わせた授業でも、進行内容を確認するために授業参観を実施した。 カリキュラム点検の意味で、学部長による授業参観も複数回実施された。初年次科目から、専門科目に至るまで、機会があれば、授業を参観するよう努めている。ベストティーチャー賞を受賞した首藤准教授の授業についても、学部長が参観し、授業の進め方について、教授会で報告を行っている。 このほか、英語科目は、兼任講師中心に授業が行われているが、兼任講師が専任講師の授業を参観し、授業内容や進め方の点検を行った。理工学部教員による参観も実施された。	今年度も、複数教員で開講する科目や、座学と演習がペアになった科目を中心に、情報共有のための授業参観が行われてきたが、単独で開講される科目についても、他教員がその授業内容を知ることは重要である。次年度以降は、より多くの教員が、より積極的に他教員の授業を参観するように、指導したい。
キャリアデザイン学部	基礎ゼミ1科目、基幹科目のうち「入門」のつく科目 14科目、「キャリア研究調査法」(質的調査)(量的調査)2科目、体験型選択必修科目 14科目、学部専任教員が担当する専門科目のうち11科目、計42科目(複数開講科目をカウントした延べ数 93科目)	42 科目 (複数開講科目をカウントした延べ数 93科目)	年間3回のFD ミーティングを4 月、9 月、2 月に実施している。基礎ゼミ、基幹科目のうち「入門」のつく科目、「キャリア研究調査法」(質的調査)(量的調査)、体験型選択必修科目については、FD ミーティングまでに担当者間で授業内の取組や課題を共有し、改善等の話し合いを行っている。とくに複数開講科目については担当者間でシラバスの内容を確認し、授業の進め方や学生の態度、修得状況等について共有することで、よりよい授業実践につなげることができている。FD ミーティングでは学部に対してこれらの報告を行い、学部教職員全員で共有することで、各自の授業改善に役立てている。また、基礎ゼミや入門科目について状況を共有することは、その上に積み重なる学部専門科目の担当者にとって、学習状況の確認にもなり、有益である。 相互授業参観については、専任教員の担当科目について、提示された公開日に教員が参観し、参観した教員によるフィードバックコメントを学部全体で情報共有する形で実施した。 リアクションペーパーへのコメントから当日の授業につなげる流れや、講義を踏まえてグループワークで議論させ、教員がグループを回って質問に答え、グループワークの結果をその場で報告させる流れなど、人数の多い授業においても学生を授業に主体的に参加させる様々な工夫が授業参観教員によるフィードバックコメントにより学部全体で共有された。 また、理論や概念と身近な事例を結び付けて理解を促す、伝える内容を絞って確実な理解に導くなどの方策も、授業参観教員によるフィードバックコメントにより学部全体で共有された。	次年度も引き続き FD ミーティングと直接の相互授業参観とを併用する。
デザイン工学部	建築学科:17科目 都市環境デザイン工学科:15科目 システムデザイン学科:5科目	建築学科:17科目 都市環境デザイン工学科:15科目 システムデザイン学科:5科目	学期末に開催される演習科目最終講評会を他学科専任教員も参加可能な学科横断型講評会とする取り組みを本格的に始動させ，年度最後の教授会でその際の気づきを共有するなど意見交換を行った。 ・建築学科 建築学科においては，1年次から4年次に至る全てのスタジオ科目をはじめ，図形の技術，フィールドワーク，ビルディングワークショップ，卒業研究，卒業制作において，全クラス合同の講評会を行い，兼任を含む教員が相互に他の科目やクラスの内容について理解し，議論できるようにしている。さらに，公開講評会を適宜開催して学内外に対して学習成果を公開し，外部意見・外部評価を受ける機会を設けている。またデザインスタジオ，フィールドワークおよび卒業制作の優秀作品と卒業研究の梗概をそれぞれ学科発行誌「スタジオワークス」，「建築研究」に掲載することで達成状況を共有している。 ・都市環境デザイン工学科 1年次から3年次までの実習系授業について，学科の専任教員，兼任教員，教育技術嘱託，さらには他学科の専任教員が参加可能な形の全体講評会を開催し，学生への講評を介して授業内容についても議論できる場となっている。また，卒業論文は全専任教員により審査を実施しており，学科内で相互に研究内容を共有するとともに，審査を通じて意見交換が行われている。 ・システムデザイン学科 PBLを基本とした必修授業を中心に，全専任教員(外国人客員教員を含む)が参加して相互参観を実施しながら学生の指導にもあたった。学生は課題を調査し，その解決方法を企画立案し，企画・中間発表・試作・成果発表の各段階で全教員からのフィードバックを受け，学生と全教員が参加して講評を行う機会を設けた。今年度はすべて対面で実施し，学生の評価物に対して講評することで意見交換を行い，相互チェックした。授業中は，学生のプレゼンテーションとパネル展示を行い，実際の作品の動作を確認しながら，全教員間で情報共有して，コミュニケーションを図ることができた。このような相互参観の機会を含めた共同指導体制をとることにより，学生の授業や課題の進捗状況を全教員が把握し，学生からの作品制作にかかわる質問などを共有し，適切にアドバイスや指導を行うことができた。	学科横断型講評会へより多くの教員が参加することを促し，より活発な学科間交流を実現する。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
理工学部	529.67	27	1.実施時期　主に2023年度秋学期 2.実施方法　以下の2通りを実施した。 a)個別授業相互参観 ・専任教員は、全ての担当科目を原則として、期間内授業相互参観可能な科目とする。 ・専任教員は、担当教員に連絡の上、所定期間内は自由に授業参観をすることができる。ただし、授業運営の支障とならないように、特に配慮する。 ・相互参観希望者は、科目担当教員と事前に、科目、曜日、希望参観時間(15分～90分　任意)を調整し、教室内等で参観する。 ・参観した専任教員は、参観報告書(委員会提出用及び担当教員提出用)を記入し、各学科担当委員及び科目担当教員に、個別に提出する。 b)学科に特化した柔軟な運用による公開(学科別) ・学科別にa)とは別の形式で、学科独自の柔軟な運用を含む授業相互参観について検討・実施する(例　PBL、実験・演習、複数教員担当形式授業、研究室配属説明会、卒業・修士論文中間発表会を用いたプレゼンテーション能力の検討等)。	・授業相互参観の実施率の向上及び個別の授業参観報告書のフィードバック方法の検討 ・客観的な授業改善に関するチェックを簡易的に行えるシステムの検討(報告書含む) ・兼任講師を含めた、全授業における授業相互参観を継続 ・参観授業数を増やすことを、今年度の課題としていたが、大きく増やすことができなかった。継続して参観授業数を増やすことを課題としたい。
生命科学部	春学期　94 秋学期　85	春学期　14(参観回数15) 秋学期　14(参観回数14)	生命科学部では、今年度、春学期(6月5日～7月1日)と秋学期(11月6日～12月2日)の2回、授業公開を実施した。今年度も例年と同程度の科目数の授業が公開された(2021年度:184科目、2022年度:183科目、2023年度:179科目)。今年度の参観回数は昨年度と同程度であった。授業参観者アンケートの自由コメント欄では、それぞれの授業で行っている工夫が参考になったという意見が多く見られた。	参観回数が昨年度と同程度だったが、まだコロナ禍以前のレベルには戻っていないため、来年度も継続して参加を促す必要がある。来年度に向けて、これまで参加していなかった教員への呼びかけ、参加してもらう方策が必要である。
グローバル 教養学部	春学期 1 科目 (非常勤講師) 秋学期 17 科目 (専任教員)	春学期 1 科目 (アカデミックスキル科目) 秋学期 3 科目 (参観回数 5)(コンテンツ科目)	・春学期はこれまでと同様、新たに非常勤講師として雇用された(教授経験が比較的浅いアカデミックスキルを担当する)教員 1 名に対して GIS の専任教員が授業参観を対面で行った。参観後には適切なフィードバックも行った。 ・秋学期は専任教員の間で対面による授業参観を行った。経験豊かな教員と比較的教授経験が浅い教員が相互に授業を参観する機会を意図的に設けたことで、お互い、学生の授業参加を促進する方法、教材の提示方法、効果的なクラスマネジメント方法等について多くの気付きを得た。 ・授業参観の結果は、春学期、秋学期ともに、それぞれ教授会(6/21)、FD ワークショップ(12/13)にて書面及び口頭にて報告され、授業運営に関する様々なトピックについての意見交換が行われた。	・授業参観を行う教員及び科目の判断基準を明確化。 ・引き続き、勤務形態(専任・非常勤)に関係なく、教員が相互に授業参観を行う機会を提供することにより、教育の質的向上に努めていく。
スポーツ 健康学部	全科目	8科目	特別(ゲスト)講師招聘授業についての報告が5件あり、学生に対する新たな知識や実践方法の提供(スポーツ医科学実習、フィットネストレーニング実習)や、キャリア形成に役立つ内容が伝えられたとの評価があった(アスレティックトレーナー概論、トップアスリート論等)。また、教職科目に関する報告では、安全配慮、技能の段階的指導、模擬授業の展開方法等について、学生が実践的な学びを深めていたと評価されていた(教職ゼミ、保健体育科教育法Ⅲ、バレーボール指導論演習)。	特に、講義系科目における授業相互参観の実施数が少ないことが課題であり、学部全体の取り組みとして教員の認識を高めることが求められる。オムニバスの授業(例えば「スポーツ健康学入門」など)は、教員が相互に参観しているので、報告書の提出を徹底することで実施率を高めることができる。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
市ケ谷リベラルアーツセンター	全科目	18	**【全体概要】** 2023年度に実施された授業相互参観(計9科目)ならびに教員相互情報交換会の内訳は、下記の通り。 ① 授業相互参観(従来型):4科目 ② 授業参観による研修(新任教員対象):1科目 ③ セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型):4科目 ④ 教員相互情報交換会:9件 授業参観の実施科目数(9科目)と情報交換会の件数(9件)のバランスもよく、また、授業参観の実施方法についても、一つに偏ることなく、様々な方法で実施されたことが確認できた。 **【実施方法や効果等について】** **① 授業相互参観(従来型)** English 3Ⅱ、留学ドイツ語A、朝鮮語5、スポーツ総合演習の4科目で実施された。English 3Ⅱでは、オーセンティックな教材に対する学生の理解度を上げる方策が採られるとともに、ペアワーク等で学生参加を促す工夫がなされていた。留学ドイツ語Aでは、「ドイツ語カフェ」(ドイツ語圏からの留学生の交流の場)との有機的連携を図り、資料の共有等の取り組みがなされていた。朝鮮語5では、文構造理解の重要性が確認できる授業が展開されていた。スポーツ総合演習では、各種LMSの使用や復習等を通じてスムーズな授業展開ができているとともに、学生が積極的にコミュニケーションを取れるような授業運営がなされていることが確認できた。 **② 授業参観による研修(新任教員対象)** English 2Ⅱで実施された。適切な難易度の教材選択と分かりやすい説明を通じて、学生がスムーズに課題に乗り組めるよう工夫されているとともに、毎回違う相手とのペアワークを通じたコミュニケーションスキル向上が図られていた。 **③ セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型)** 情報処理演習Ⅱ(2回)、文化人類学、文化人類学Lの4科目で実施された。情報処理演習Ⅱでは、学習項目により理解度に差が生まれるため、理解度が低い項目に対する扱い方の改善策が検討されている。文化人類学では、対面授業とオンデマンド授業における教員側の話す速度に着目し、後者ではよりゆっくり話して学習内容の理解促進を目指すことが示されていた。文化人類学Lでは、専門用語がやや多用される傾向にあるため、理解促進のための工夫(用語リスト作成等)を検討していることが確認できた。 **④ 教員相互情報交換会** 人文科学、自然科学、英語、諸語(ドイツ語(2回)、フランス語、ロシア語、中国語)、保健体育の各分科会(及び各言語部会)において、計9回実施された。昨年度は全てZoomで行われていたが、2023年度は対面で実施した分科会(及び各言語部会)もあった。前年度授業の振り返り、カリキュラムの説明、授業運営上の留意事項の周知、授業の工夫や学生の意見からの気づき等の共有、教員同士での各種相談や交流等が行われ、このような情報共有の場の重要性について改めて認識できた。	授業参観と教員相互情報交換会の総数(合計18)は昨年度と変化はなかったが、授業参観の回数が減少している(2022年度:14科目⇒2023年度:9科目)ため、積極的な実施を呼びかけたい。対面授業のみならず、一部実施しているオンライン授業においても授業参観を積極的に活用し、授業の質の向上に寄与したい。また、コロナ禍が一応明けたこともあり、教員相互情報交換会は増加した(2022年度:4件⇒2023年度:9件)。FDに寄与する貴重な機会であるため、今後も積極的な実施を呼びかけたい。
小金井リベラルアーツセンター	原則として全科目(ただし担当教員が公開を希望しない科目を除く)	9科目	今年度も従来同様、参観期間は限定せず、春学期・秋学期授業実施期間のいつでも、関係教員の関心と都合に応じて参観が実施できるようにした。参観の可否や日時などは分科会単位で事前調整し、参観は対面もしくはオンラインにて行った。 参観した教員は、指定の報告書を記入し各分科会単位でとりまとめ、運営委員会で情報共有を行った。今年度は報告書の書式を改訂し、分科会の垣根をまたいだ参観を行いやすいようにした。	授業相互参観を通じて得た知見を、参観した教員・参観を受けた教員以外の教員とも共有し、授業実施にいっそう生かしていけるようにしたい。
SSI(スポーツ・サイエンス・インスティテュート)	5科目	1科目	(1)実施方法 今年度のSSI授業相互参観のねらいの一つとして、新しく科目を担当する教員に対して、執行部が中心となって授業を参観し、フィードバックを通じて、担当者にとっても学生にとってもより良い授業となることを揚げた。 今回対象となった新任の専任教員に対し、授業相互参観が可能かどうか問い合わせ、了承を得られた科目についてSSI執行部で2023年11―12月の期間に参観を行った。 (2)授業実施者へのフィードバック 参観終了後、科目担当者と対話をしながら、フィードバックを行なった。シラバス内容に沿っていたか、到達目標は達成できたか、課題等のフィードバックについて適切に行なったかなどの観点から、全体的な内容について意見交換した。 (3)効果 【授業の特徴および工夫】 担当科目は、スポーツが文化として発展してきた歴史やその社会背景を学び、現代スポーツの現状と課題について **多角的な理解**を目指す授業であった。 上記下線部を達成するために、以下の点が工夫されていた。 ①授業で扱うトピックについて、学生本人との関連性や接点をもたせていた。 e.g. アスリートのキャリア、大学スポーツなど ②他学生の意見を知る場を設定していた。 e.g. 学生のリアクションペーパーを次の授業冒頭にて紹介、学生が当事者としてかかわるトピックについてディスカッションの場を設けるなど。 なお、授業全体としてシラバス通りの進行されていた。 【担当教員からの意見】 学生の反応が良かった点 特にアスリートのキャリアについて考える回は、現在悩みや漠然とした不安を抱える学生にとって、自分事として捉えながら授業に参加している様子がうかがえた。また、大学スポーツに関するディスカッションでは、体育会の垣根を超えて大学スポーツをより良くするための方法を話し合うことができていた。普段は他の体育会学生の様子を知る機会が少ないため、同じ悩みを抱えていることを理解するだけでなく、自分にはない視点からの意見に驚く学生もいた。 【振り返り(次年度への改善点など)】 アクティブラーニングの実施について、ディスカッションの時間(話し合いの時間)が少なかったように見受けられた。改善点としては、ディスカッションに向けた事前の情報提供(予習の課題)や実際の流れを工夫することにより、効率よくディスカッションの時間を確保できると考えられる。場合によっては、複数回の授業に分けてディスカッションを実施する方法もあり、授業全体の構成を検討する必要がある。	1)今回は新任の専任教員に対して授業参観を行ったが、専任教員に限らず、兼任教員にも参観を呼び掛けるように検討する。 2)24年度は必修科目にオンライン科目が加わるため、内容についてのみならず、その効果などについても授業参観を通じて検討する。